

「人の名前連呼すんな漫画族」

「ばっかおまえそんな暴言しやがって今すぐ漫画族に謝れ！ 地面に額打ちつけて謝れ！」

そんな漫画族でらさんにウツカリ口を滑らせ

た去年の担任教師の情報によると、始業式であ

る今日、俺たちのクラスに東京からの転校生がやってくるらしい。なんとも嬉しいことに女の子

だそうで、容姿端麗、才色兼備、全てを併せ持ったそれはもうスペシャリスト。この学校で彼女に勝る者はいないという。

「ちなみに容姿端麗、才色兼備からは誰情報だ」

「俺の脳みそ」

「妄想やないか」

ふたりで頭に手刀をくらわしてやると、てらは「てへへ」と舌を出して首を傾げた。非常に気色が悪い。でも女の子というのは事実ですよ！ と、

てらはまた果敢に拳を振り上げた。正直そのまま

で女子が嬉しいのかあまりわからない。この高校は男女共学で、男子も女子も同じ人数ぐらいいるし、今更ひとり増えたところで何も変わらない気がする。ということ、てらに伝えるとご本人

はこの世の終わりのような目で俺を見た。

「お前は女子というものに興味はないんか！」

「いやそりや人並みにはあるけど、まあ、別に今はそんながつくほどには無いなあ」

素直な気持ちだった。今はこの二人とゆつくりまったり過ごしているのが楽しかったし、クラスの女子とも友だちとして気軽に話すぐらいでちょうどよかった。何故かふゆも馬鹿にしたような目で俺を見てくる。

「負け犬の遠吠えというやつやな」

「お前に言われたくないとかそれ言ったら俺たち三人とも負け犬やし」

「俺とふゆは負け犬やないよ。な、ふゆ」

生まれてこのかた、女の子を綺麗だと思ったことがない。

「転校生がやってくる！」

一年のときに同じクラスになり、今年もめでたく同じクラスとなった俺の友人北宮てらは、握りこぶしを震わせ、とびきりの笑顔を浮かべてそう告げた。同じく一、二年と同じクラスになった俺の友人宮崎ふゆは、てらと対照的に、面倒くさそうな顔をして腕を組み、ため息を吐いた。俺とてらは高校からのお付き合いだけれど、二人は幼馴染だそうで、幼稚園から高校にかけてずっと同じ学校らしい。だからなのか二人はとても仲良しで、いつも一緒にいてよく漫才のような会話を繰り広げている。見かけるたび二人は隣同士に立っている。肩を組んだり腕を組んだり抱きついたり、男同士にしてはスキンシップもやけに多くて（九割九分九厘てらが、ふゆに対して、だけれど）、俺は実は二人は付き合っているのではと考えている。でもそうからかっても、てらは「ぎゃはは」と笑うだけ、ふゆは思い切り顔をしかめるだけでかわされる。

「転校生がやってくる！」

「二度言わんでもわかっているって」

てらが鼻息荒く言うので、どうどうと肩を押さえてやる。ふゆは実に不愉快そうでさっさとこの場を去ろうとするけど、てらにガツと腕を組まれて逃げられない。ふゆの眉間にますます皺が寄る。

「なんでそんなテンション高いんよ……」

「わかっていないなあお前はふゆ！ 転校生といえはあれやんふゆ。恋とか、青春とか、ラブコメとか、きゃっあはっうふふつてなるようなアレの始ま

てらがワザとらしく。ふゆの首に腕を回す。ふゆの肘打ちが華麗にてらの脇腹に決まった。ぐえつと、てらが呻き声をあげてうずくまる。相変わらずだ。たとえ転校生が来ようと俺たちは変わらないし、俺だって変わらない。

生まれてこのかた、女の子を綺麗だと思ったことがない。

テレビのなかにいる女優を綺麗だと思うことはある。だけど同世代の女の子に対して、綺麗だとか美しいだとか、かわいいとは思っても、たとえば心臓がときどきしてしまいうくらい、女の子にきららしたものを感じたことがなかった。

だから別に、これからもそうなんだと根拠もなく漠然と思っていたし、友人と遊ぶことが楽しかった俺にはまだ必要のないものだと思っていた。

結果的に、転校生が来たって、俺と、ふゆと、てらの友人関係が変わることだってなかったわけだ。

「あー、実はだな、うっかり教えてしまった奴もいるんだが、このクラスに転校生が入ってくる。東京の高校から来たそうさ。ちなみに女子だ」

始業式が終わりホームルーム。去年と同じになった担当教師であるミノル先生がそう言うので、教室の中で喝采がおきた。ミノル先生は帰国子女というものらしく、女性であるにも関わらず一人称が僕であること、ハーフである証拠の金色の髪、黒色の目、そして本日の転校生同じく完璧なる標準語で話すのが特徴だ。関西弁で喋るとなんだか負けた気がするらしい。本人が下の名前の方が慣れているからそう呼べというので、俺たち生徒は敬意を持ってミノル先生と呼んでいる。

「ミノル先生、転校生はお綺麗ですか！」

「北宮、きみの頭がもつとお綺麗になればお答えしてあげよう」

ぶーたれる青少年に、ケラケラと笑い声が湧く。どんな子なんだろうと女子がきやつきやと話している。俺はというと、どんな女の子なんだろうなどと想像しつつ、その反面で、もう高校二年生なんだなあと全然違うことを考えていた。三年もあると思っていた。けどもう一年も過ぎ去っていた。考える時間はたくさんあるとくつろいでいたら、俺は全然考えていなかった。毎日そこそこ楽しいし、充実してるつもりだし、でも、俺はこれから、なにをしていくんだろう。みんなはどう考えているんだろう。妙な焦燥感に襲われる。クラスが浮つくなか、俺だけが取り残されているような気がしてくる。なにをする。俺は、いつたい、なにがしたいんだろう。

しかし、そんな焦燥感などは一瞬に吹き飛ばされることになる。

「ほら、入ってこい」

先生がそう扉の向こうに呼びかけて、ゆつくりと扉が開かれた。一瞬、クラスが静まり返る。それはその子だったからではなく、いざ転校生と対面という、学生らしい緊張の瞬間というか、そんなものだったのだと思う。

だけど俺は違った。うつむいた顔をあげて、視界にその子が映った途端、息が止まった。

肩まで伸びた、ふわりとしたまっくろの髪。大きなまっくろの瞳。少し細く見える輪郭。規則をきっちり守った、膝にかかるスカートの丈。柄のない黒のソックス。ぴんとした背。凜としていて、でもどこか緊張していそうな表情。なんだろう、これは。知らない感情が全身をむしばむ。胸がしめつけられたみたいに痛くなる。呼吸の仕方がわからなくなる。心臓の音が、ひどく大きく、響く。

その子は教壇の傍まで行くと、先生に促されて

白のチョークを持ち、黒板に自分の名前を書いた。チョークを持つ手、黒板へ伸ばす腕、すべてに目を背けなくなる。書き終わると、その子は俺たち生徒に向き直った。少しうつむいて、でもすぐ顔をあげる。

「——はじめまして」

その子は笑った。ぎこちなく、気恥ずかしげに笑った。中性的なソプラノの声俺の鼓膜を侵して、離れてくれない。俺はどうかしてしまったのか。どうしてこんなに苦しいんだ。さつきまで俺はなにを考えていたんだっけ。なんで俺はあの子から目が逸らせないんだろう。なんで、あの笑顔が俺だけに向けられたらなんて、思ってしまうんだろう。なんで、こんな、俺は。

「あいつの隣に座ってくれ」

はつと我に返ると、ミノル先生が俺を指差していた。あれ、いつのまに自己紹介とか終わったんだろう。それともなかったんだろうか。ぼおつとしていたつもりはなかったのに、直前なのが全くわからない。そして何故俺は指を差されているんだろうと思ったけど、実際は俺ではなく俺の隣の、空いた席を差していた。なるほど窓際の一番後ろの席が空いていたのは転校生の席だったからか！と自分に丁寧の説明するみたいに頭のなかで考える。え、あれ、隣？ 彼女ははいと頷くと、まっすぐ俺に歩いてくる。性格には俺の隣の席なんだけれど。よろしくなあと女の子にちよくちよく声をかけられていて、その度に彼女は控えめに微笑んだ。頭が熱い。心臓も熱い。ばくばくする。ふらふらする。彼女が隣にやってきて、彼女のスカートが揺れる。席に座り、前に垂れた髪を後ろに直している。なぜだろう。なんでこんなに一つ一つの仕草が、こんなに、

ふいに、彼女が、こつちを見た。

ずつと射抜くように見ていたんだから気になる

のは当たり前で、でも、そのときの俺は本当におかしかったから、不思議そうに首を傾げる姿に、また、鼓動が高鳴って。なにがなんだかわからなくなる。あれ、どうした、俺ってこんな風になるやつだっけ。とにかくなにか言わなくちゃ、なにかってなにを。

「あの」

「はつはい？」

声の上擦った。情けなくてすぐ後悔した。ミノル先生が既に何か連絡事項を話しているが、クラスのなかはまだざわざわと話し声ばかりで、その視線の大半が彼女に向けられている。みんなこんな感情になっているのだろうか。こんな声もうまく出せなくなるくらい、息苦しく。でもみんないつも通り、いつもより少し楽しそうなくらいで。

「どうかしたんですか」

透き通った声俺に向けられている。敬語なのは、同い年でも初対面だから、どう話していいのか掴みきれないんだろう。まさしく今の俺だ。俺の方がもつと上だ。彼女の声俺の鼓膜に響いてる。それだけで胸がはりさけそうになる。もし彼女の笑顔が、どうすれば笑顔が、俺に向けられるんだろう。

「い、いやその、どうかしたってわけじゃないんですけど」

「けど？」

「おつ」

また上擦った。やけに大きな声が出た。生まれてこのかた、俺は、

「お、おつ綺麗なな、とおもつ、てー！」

「こんなにすつとんきような声をあげたことはなかった。」

クラスがしんと静まり返る。全部の目が俺に向けられている。あれ、と俺の口元はひきつった。俺、いま、初対面の人に、なにを言いやりましたか。

彼女の黒い瞳が、ぱちん、ぱちんと、またたいて、それから、一気に眉間に皺が寄った。

「……はあ？」

* * *

そのあと、クラスみんなに爆笑されるわ、てらとふゆには散々からかわれるわ。俺はしばらく、笑いと化したのだけれど。

俺は最初から、彼女にそんな顔しかさせていないわけで。

そのとき生まれて初めて、誰よりも綺麗な女の子に出会った俺は。

彼女が誰よりも大切な人になることも、彼女にとつて俺が誰よりも大切な人になることも、全く予想していなかったのだ。

* * *

「そんな時期もありました」

「どういう時期」

「自分の素直な気持ちを伝えることに苦手な時期」

「……………今は」

「お前にベタベタ惚れ惚れオンリーアイラブユーです」

「わかったからもう言わなくていい」

バサッと切り倒して彼女は出来たての焼き芋にフーフーと息をかけてから、恐る恐るかぶりついた。フーフーしている口がとても可愛らしくても

う何度かやってほしかったけれど、さすがに変態ちつくにも程があるので我慢をする紳士な俺らしいです。

今日は学校の裏庭で焚き火と焼き芋の調理実習を行っていた。もちろん今は授業時間ではなく放課後で、掃除で集めた落ち葉でコソソリ暖まっているというわけだ。ちなみにさっきまで、てらとふゆもいたのだけれど、てらがふゆの焼き芋の分まで持つて脱走したので、素直なふゆは、全速力で追いかけていった。仲の良いことは良きことである。

「熱いから気つけや」

「ふん」

焼き芋にかぶりつきながら頷く姿もまたかわいい。ハートがきゅんとしつつ、俺も自分の焼き芋をかじる。あつい。

「でもやっぱり、言葉は大事やと思うんです」

「はんのはなひ」

「焼き芋美味しいからって食べながら喋ってはいけません」

彼女はハツとして慌てて口の中の芋を呑みこんだ。真面目なところもこの子の良きところである。とうかこの子の全てが良きところであるけれども。

「てらとふゆもいなくなって二人きりですよ」

「はあ」

「てらとふゆもいなくなって二人きりですよ」

「どうして二度言うの？」

「何か大事なことがあるんじゃないですか」

「何かって何」

「二人つきりねダーリンうふふつ的な。らぶらぶできるわねダーリンうふふつ的な！」

「焼き芋おいひい」

スルーされました。いつものことなので俺はめげません。泣いてません。もぐもぐしてるこの子が

わいいです誰にもあげません。

彼女を好きになつて俺は自分の想いをめいっばい外に出すようになったけれど、彼女はなかなか出そうとしてくれない。もちろんそれでも十分伝わってくるから不安とかそういうことじゃないんだけど、男と言うものはやはり欲が深いもので、たまには赤い顔で良き言葉を言つてほしくなるものである。二人きりになれば直のことである。

「俺より焼き芋を取るっていうんかお前はーはふはふ」

「舌やけどしないでよ」

「もうした痛い」

「何してんのよ……」

なんて呆れた声を出しつつ、肝心の話題を避けようとしているのが丸見えである。あの黒歴史確定最悪の第一印象から、せいっぱいの努力をして無事お付き合いするまでに至ったわけですが、彼女はなかなか俺に好きと言ってくれない。俺が言い過ぎなのもあるけれど、溢れてしまうのだからしょうがない。伝えて、知ってもらつて、そして俺の心はホカホカになる。そして彼女の心もホカホカになればいいと思う。

「……うまいなあ、焼き芋」

「うん」

「焼き芋好き？」

「好きっていうほどたくさん食べないけど、好き」

「好きかー」

「うん」

「俺も好きー大好きー」

彼女はとても聡い子なので、俺の言葉の意味をすぐに正しく拾ってくれる。そのため彼女の頬が赤くなったのは、だんだん冬に近づいてくる気温の所為ではないと考えられる。それだけで俺の心はホカホカになる。

「おいしいもんなあ、焼き芋」

「……すき、だけど」

ぼそりと何かを言うときは、彼女は大事なことを伝えたいときだ。だから俺はじつと彼女を見ろ。

彼女の朱色の頬や耳とか「あんたのこと、ほどでは」両手で可愛らしく持った焼き芋とか「ない」こちらを見れずに伏せる睫毛とか「けれども」ホカホカがもつと強くなる。心だけじゃなくて頭も手も足も全部あつたかくなる。俺は隣に座っていた距離をもつと詰めた。肩も腕もびったりくつつけて、ぎゅつてする。

「ちよ、つとー」

「えへー」

「調子のんなバカ」

そんなこと真つ赤なお顔で言われてもかわいいだけです残念。俺たちはいつまでもこうしてられる。俺が真つ直ぐにこの子に落ちて、彼女がその手を掴んでくれたことは、つまりそういうことなんだと思う。あの日俺たちがああして出会ったことも、今日俺たちがこうして一緒にいることも、俺たちがホカホカになる運命だったわけなのだ。そう考えたら、もつともつとホカホカになれるのだ。

「あ、バカップル！」

だからこの勢いでチューしても許されるかなって思つたときに、てらとふゆが帰ってきて妨害されてしまったことも、彼女が俺といちゃいちゃしているところを見られて恥ずかしくなり俺を思い切り突き飛ばしたことも、きつと俺たちのラブロマンスはこれからも続くというディスプレイでありエタニティであるわけで。

今日も今日とて、俺と彼女の運命はホカホカのままなのでした。

まる。